

# 火野葦平「白い旗」論

— 平家一族女河童の矜持と悲哀 —

増田周子

はじめに

火野葦平は、昭和十五年七月十日発行の『九州文学』（通巻二十二号）に発表した「伝説」（後の「石と釘」）を最初に、多くの河童作品を残している。その量は膨大で、ジャンルも、小説、童話、エッセイなど多岐に亘っている。火野にとって河童作品とはどんなものだったのだろうか。自身の作品を集めた河童物の集大成『河童曼陀羅』の「後書 河童独白」で火野は「私はけつしてカツパを片手間に書いたわけではなく、どんな短い作品にも打ちこんで取り組んだ」「私のライフ・ワークの一つ」である<sup>①</sup>と述べている。火野にとって、河童物は、自身が真剣に取り組んできた、貴重な作品群なのである。佐藤春夫は、火野の河童作品について、次のように記している。

芥川龍之介のカツパはその知性によつて成る人間生活の諷刺であつたが、火野の河童はひとり知性のみの産物ではなく、その情意を傾けて成る。その人の相違は自ら文の差となつて現はれ、火野の河童の生態が芥川の白眼を以つて見たるものと異なるは言を俟たぬ当然であるが、僕が芥川の白眼に見たるカツパを喜ばず寧ろ火野が青眼を以つて河童を見るを愛好する（中略）火野川の河童の芥川のそれに優るとも劣らぬ詩美のあるは疑はぬところである<sup>②</sup>。

佐藤は、火野の河童物を愛好し、芥川河童に「優るとも劣らぬ詩美」があると高く評価している。火野の河童作品は、決して色褪せない光彩を放つていて、火野文学全体の中でも重要な

位置を占める。にもかかわらず戦争作家として著名な火野の河童作品は、これまでほとんど論じられることがなかった。

そこで、本稿では、北九州の平家伝説をもとに創作した、火野の河童物短編小説「白い旗」をとりあげ、そのもともになった伝説を紹介し、主題や作品に込められた意味について論じていきたい。なお、調査のかぎりでは、「白い旗」はこれまで、論じられたことがなく、同時代の評や先行の論考は見当たらない。

「白い旗」は、昭和十五年九月一日の『新風土』に「白き旗」という題で発表された。『石と釘』（昭和二十二年二月二十日、東京出版）に収録されるときに、「白い旗」と改題された。火野生前の、収録本は以下のとおりである。

- 一、『山芋日記』（昭和十五年十月五日、小山書店）※「白き旗」
- 二、『伝説』（昭和十六年五月三十日、小山書店）※「白き旗」
- 三、『石と釘』（同）

四、『河童』（昭和二十四年十一月十五日、春陽堂）

五、『河童曼陀羅』（昭和三十二年五月一〇日、四季社）

六、『火野葦平選集 三巻』（昭和三十三年七月三十日、東京

創元社）

収録本による異同はほとんどない。よって本稿では『河童曼陀羅』収録の「白い旗」をテキストとして論じていきたい。

## 一、平家一族末裔の河童の矜持

「白い旗」は、二匹の河童の様子を語り手が語る物語である。この二匹の河童は、「褐色」の色をし、「さまざまな種族を軽蔑して」「矜持を胸いつばいにふくらませ」ていた。そして「全山がごとごとく紅葉するのを指折りかぞへて待つてゐるのである」。二匹の河童は次のような由来の河童だった。

二匹の河童の先祖はもと位高くやんごとなき公達であり、あるひは武士であつたが、一の谷にやぶれ、壇の浦に落ち、つひに壇の浦の海底深く沈んで亡んだ。（中略）壇の浦の海底に、かれらはひとつの歴史を終るとともに、男たちは蟹となり、女たちは河童となつた。

（「白い旗」124頁）

二匹の河童は、もともとは上流貴族だった。壇の浦で死んだとは何を示すのだろうか。『北九州市史 民族』には次のようにある。少し長いが引用する。

寿永四年（一一八五）三月、さしもの栄華を誇った平家も、

源平壇之浦沖の合戦に滅びた。このとき、平家の御大将であった能登守教経の妻である海御前は、大奮戦をして勇名をとどろかせた人である。

平家の船が壇之浦に追いつめられ、進退きわまって一門の者どもが海に身を投げてしまうのを見送り、いまはこれまでと、海御前は敵の船に飛び移った。いかめしい敵将を一刀のもとに切り落とし、幼い天皇の後を追うて海に沈んだとされている。

数日後、奥方の死体は大積の海岸に漂着した。死顔は凜としたうちにも微笑をたたえ、生きているような顔付きをしていたと伝えられている。遺体は村人によって乙女山の一角、海辺に突き出ている老樹（枯死し今は猿田彦の石塚がある）の下に葬られた。

この奥方が河童の総取締として、いつのころからかわからないが、河童族を支配するようになったといわれ、土地の人は海御前様とあがめた。<sup>(3)</sup>

〔北九州市史 民族〕812頁

ここにあるように北九州市門司区には「源平のいくさ、壇浦合戦で入水した武士たちは平家蟹となり、女官たちは河童に化

したという伝説がのこされている<sup>(4)</sup>すなわち、作品に登場する二人の河童は、もとは平家の一族だったのである。火野葦平は、昭和三十一年一月十五日に、女河童の総大将海御前が祭られている、大積天疫神社とその傍にある水天宮を訪れ、女河童の住まいを視察し、敬意を表したのであった。その時の様子を火野は次のように綴る。



海御前の像



大積海岸

大積は門司市街の裏手にあたるさびしいところであった。ここの海岸に、能登守教経の奥方が屍体となつて流れついたのを、村人が厚く葬つた。海御前はその化身だといふことになつてゐる。

悲壮な源平合戦はさまざまの美しい物語を生んでゐるが、一ノ谷、屋島、壇ノ浦、と西へ西へと逃がれた平氏も、ついにここで亡び、海底に沈んだ男たちはヘイケガ二となり女官はカツパになつたと伝えられている。その多くの女カツパたちはすべて海御前の指揮下にあるわけだ。<sup>(5)</sup>

これらの北九州地方に伝わる、平家一族の女官は河童になつたといふ伝説を踏まえて、「白い旗」は描かれている。

作品では、二匹の河童は、「自分たちの上におほひかぶさつて来た霧のなかに自分たちのからだをかくし」次のように妖術を使つて動作する。

二本の腕をたかくさしあげてうちふる。それはひらめく二本の赤い旗のやうに見える。かれらは胸をはり肩をうちふるふことによつて、自分のからだをどのやうにも赤くする

ことが出来る。それはしまひに真紅のひらめく長旗のやうにみえはじめる。  
〔「白い旗」124頁〕

「この術をたびたび行ふことは生をちぢめるといふことによつて禁じられてゐるにもかかはらず」、

かれらの矜持のころはおさへがたく、名門の紋章のまほろしを追ふたへがたいよろこびはこのやうにうつくしい霧の舞台のときには生死の観念をのりこえてしまふのである。  
〔「白い旗」124頁〕

この河童たちは、壇之浦の海に沈んで河童となつた今でも、平家のプライドを忘れず、自分たちの命を縮めても、真紅に輝く平家のシンボルの赤い旗をたなびかせようとしているのだ。そうして普段は「立派ではない」が、「禁ををかけて真紅のほむらとなるときは、そのあざやかな赤の色はなめらかな水気」で「きらきらと光り、うちふる二本の手はひるがへる旗のやうにみごとなのである」。すなわち、二匹の河童らは、自分たちの矜持を保つため、平家の赤旗を、自らの命をすり減らし、生命をもつて掲げているのだ。

二、「白い旗」における筑後川の九千坊河童と阿蘇的那羅延坊に伺候する河童

「白い旗」には、「筑後川の九千坊一族」と「阿蘇的那羅延坊に伺候する」河童について、先にあげた二人の河童と比べて、対称的に描かれている。「筑後川の九千坊一族は河童の水藻から簇生した。植物を先祖とする」河童であるとあり、次のように語られる。

筑後川の水底に棲む頭目九千坊に統率されてゐる多くの河童たちは、この二匹の河童から見ればまことに下賤なるものであり、教養も思想もなく、勇氣もないものである。阿蘇的那羅延坊に伺候する輩にいたつては沙汰のかぎりである。かれらは第一になにごとかあればすぐに嘴を鳴らすやうなはしたない所業をする。第二にその身体の色は草に似てゐる。そして生を終るときには青いどろどろの液体となつて溶け流れ、その不潔さと臭気とはたへがたい。

（「白い旗」123〜4頁）

ここに「筑後川の九千坊一族」とはどんな河童なのか。

九千坊河童については、和田寛編『河童伝承大事典』の「河童渡来の碑」に以下のようにある。

昔、九千坊という頭領の率いる河童の大群が、古代中国の黄河方面から渡来し、球磨川河口の「徳の津の淵」（徳淵）に上陸したと伝えられている。<sup>(6)</sup>（『河童伝承大事典』608頁）

さらにこの項には「その地に建てられたのが『河童渡来の碑』」で、「この碑は、随筆家の佐藤垢石が『山童閑遊』（後の『河童閑遊』<sup>(7)</sup>）の中で、九千坊河童に率いられた九千匹の河童たちが、中国から黄海を経て、この地に上陸したという話を紹介したのが縁となつて、地元の人たちが建てたものである」とある。すなわち、筑後川の九千坊一族とは、中国から渡来した河童ということになる。

また、『九州の河童』の「河童の年貢」<sup>(8)</sup>には、次のような熊本県の民話を紹介している。ある日、商人風の男が船頭を引き留め、高い運賃を払い、福岡県柳川に樽を運ぶように依頼した。決して中身を見るなど念を押されたが、船頭は樽の中を見てしまった。中には、黒い人間の肝の塩辛が詰まっていた。添えられた手紙を見ると、「天草中の河童が、柳川河童天国の総元締

の九千坊さまに献上する年貢の人間の肝で、九十九詰めてある」と書かれていた。続けて手紙には、決められた年貢の百までは一つ足りないの、船頭を殺して肝をとり、百にして欲しいと記されていた。船頭は、「くそ河童め」と手紙を破り、樽を有明海に捨てて合掌した。ここでは、九千坊河童の総元締は、柳川にいと設定されている。城田吉六によると「筑後川流域の田主丸にいた」という説もあり、「要するに筑後川の流域にいたということにすれば各地方の物語が生きてくる」という。民話はまちまちであるが、九千坊河童は、「白い旗」にあるように、「筑後川の水底に住む」とするのが妥当なようだ。そして、かなり、勢力を張り、この民話にあるように、人を殺すことも厭わない獐猛な河童のようである。

その他、九千坊河童についてはこんな逸話も残っている。藤澤衛彦の記した「河童譚」には、以下の如くある。

肥後の河童は、加藤清正のおきに入りの児小姓を水に引き入れて殺したので、清正の怒りをかい、一匹も肥後は河童を残すなと河童族退治することとなったので、河童の魁首九千坊が、清正信仰の僧侶に宥められんことを請い、以来決して悪さをしないという誓いを立ててゆ

るされたということです。<sup>9)</sup>

ここには九千坊河童が加藤清正のお気に入りの子小姓を水に引き入れて殺したことが書かれている。「白い旗」では、九千坊河童は「まことに下賤なるもの」とあるが、かなり恐ろしいことをしてかす河童たちであったようだ。火野は九州の作家なので九州に伝わるこれらの河童伝説を知っていたのだろう。

「阿蘇的那羅延坊に伺候する」河童はどうであろう。和田寛編『河童伝承大事典』の「阿蘇的那羅延坊①」に次のようにある。

筑紫海岸地方の河童は、毎年、四月、五月頃に、筑後川の流れを遡って、豊後の日田を経て、阿蘇的那羅延坊（奈羅延坊）の許に伺候するといわれている。

那羅延坊は俗に「河童の司」といわれ、代々、人に頼まれて河童を鎮める祈祷をしたり、河童除けの護符を出したりし、折々は近国を巡回したりしたという。

（『河童伝承大事典』622頁）

どうも阿蘇的那羅延坊の許に伺候する河童とは、那羅延坊という、「河童の司」のところに伺候している河童ということに

なりそうだ。柳田国男は「深山に小児をみるということ」で次のように記している。

阿蘇的那羅延坊など、いふ山伏は山家に住みながら河童子防の護符を發行した。即ち夏日水辺に遊ぶ者の彼等の害を懼る、如く山に入つてはまた山童を忌み憚つて居た結果かと思はれるが近世に入つてからその実例が漸く減少した。大体にこの小さき神は、人間の中の小さい者も同じやうに、気軽な悪戯が多くて驚かすより以上の企て得なかつた。<sup>(10)</sup>

すなわち、柳田によると阿蘇地方の河童たちは悪事を繰り返していたようだが、ようやく那羅延坊という山伏が河童の悪行を鎮めたので、「近世に入つてからその実例が漸く減少した」という。すなわち、「白い旗」では、「阿蘇的那羅延坊に伺候する輩にいたつては沙汰のかぎりである。」というが、このような噂が九州地域を中心に古来より蔓延していたのである。

以上、「白い旗」では、平家一族の河童の高貴さや、品格をよりいっそう強調するために、九千坊河童や阿蘇的那羅延坊の許に伺候する乱暴な河童などを登場させ、対比させているのだ。

### 三、平家一族女河童の悲哀

平家一族は壇之浦で滅びた後「白い旗」にも書かれるように、北九州門司区地方では「男たちは蟹となり、女たちは河童となつた」とされる。<sup>(11)</sup>そして、作品では女河童たちは、「皿に水をみだし、長髪をひるがへして遠い国々にさまよひ出た。かれらは伝説を負うて花さく野べに、水ぬるむ河畔に、小鳥うたふ森にいこうた」。「赤の旗こそはかれらの矜持の柱である」だから、女河童たち二人は、「流れる霧の中を飛んで、あかい虎杖の上にやすんだ」。また「肩を組んで、あかい百日紅の花びらの上に降りた」。二匹の女河童は、平家の旗印の赤色を求めてさまよい続けていたのである。だが秋になると河童たちは、「遠景のながめに愕然」となり、「けたたましいおどろきの声をあげた」。

かれらは見た。見はるかす亭々たる杉並木の前方にへんぼんとひるがへる数十旒の白旗を。その仇的の旗は流れる霧の中にひらひらとひるがへり、光りながらしだいにこちらに迫つて来るやうに見えた。  
（「白い旗」124～5頁）

源氏の旗は、白旗である。二匹の河童は、「いたるところに白々とした蕎麦の花が咲いて」いるのを見て、源氏の白旗を思い出し「今やいつさいの矜持を喪失した」。

この「白い旗」の描写にある部分も、北九州市門司区周辺の伝説を踏まえている。平家の武将能登守教経の妻は、河童となり北九州市門司区の大積海岸に流れ着き、河童の総大将となつて海御前様として崇められたとされることは先に述べた。海御前はいつも、平家一族の女河童たちを集めて次のように命じていた。『北九州市史 民族』には以下の如く記されている。

毎年五月の節句になると、御前様は河童族を集め「今日からお前たちを自由にしてやるから、白いものや笹に関係あるものに出会ったら、水中に引き入れてしまえ、ただむやみに人間や畜類の生命をとってはならない。秋風が吹き出して涼しくなりソバの花が咲くころ、急いで戻ってこい」と、解放された河童族は、思い思いに川や池のほとりに出かけ、源氏に関係のある者に害を加えて、秋に帰ったとき<sup>12)</sup>に恩賞を受けることになつていた。

〔北九州市史 民族〕813頁

秋になると源氏のシンボルの白色の蕎麦の花が咲き乱れる。そうになると、刃りは白一色になるので、平家一族の河童たちは落胆せざるを得ないので、急いで海御前の元に戻るよう指示していたのである。「白い旗」の二匹の河童たちは、白く咲き乱れた蕎麦の花を見て、平家のプライドを傷つけられ「青ざめ」た。「背を凍らせて百日紅の花びらの上からいつさんに飛び立つた」。いったんは、「曼殊沙華のあかい葩を見つけてそこに降りた」ものの、「野辺のはずれにまたもかれらに迫る白い旗を見」、「凍りつくやうに息をつめ、無意識のうちに肩を組み曼殊沙華の葩をはげしく散らして飛び立つた」。

かれらの敵はなほもかれらの行くところ<sup>13)</sup>に待つてゐた。もはやかれらの行かんとする地上は、いづこも白旗をもつて満たされてゐたのである。〔白い旗〕125頁

このように、一面に蕎麦の白い花が咲き、もはや、平家のシンボルの赤色は見当たらないほどであった。こうして二匹は、「かぎりなき失意と寂寥のころをいだいて海底にかへつた」のであつた。火野の「白い旗」は、伝説をふまえながらも、海御前

に指示されたからではなく、ただ、蕎麦の花に源氏の白旗の幻影を見たために、平家の女河童たち自らが恐れ、失望し、平家一族のいる海底に戻ったことにしている。

#### 四、「白い旗」のテーマ

二匹の河童は、至る所に源氏のシンボルの白を見て、失意のうち、平家一門の蟹になった男や、河童となった女たちが生息している海底に戻った。そこでは、「さきにかへつた多くのともだちがむつりとなにもいはずに膝をいだいてうづくまつてゐた」。その様子からは「かれらが一様に遭遇した旅での運命を感じとられた」。そして、「二匹の河童が水をあわただしく揺るがしてかへつて来たのを見ても、ちよつと背を鳴らしただけ」であった。二匹の河童だけでなく河童となった平家の女たちは皆、源氏のシンボルの白旗がたなびくように、白い花が地上に咲いているのを見て、諦めと悲哀に打ちひしがれたのである。もはや、かつてのように、「船べりに立つて青空をあふぎ、雅やかな歌曲をうたうた思ひ出や、絃ふるふ琴の音色や、銀扇のかげりなどへの追憶が、すべて赤い旗につつまれてかれらの脳裏にうか」ばうと、今や白い蕎麦の花が満面に咲き乱れてい

るのみである。この小説は、残酷にも、平家の一門の女河童たちの望みを打ち砕く。火野は、のちにこの平家の女河童たちについて「敗戦カッパ」というエッセイで次のように記している。

長期戦のはてに、平家は壇ノ浦まで逃げのびて、遂に、ここでほろんだ。男はヘイケガニとなり、女はカムロとなつて、海底に沈んだのである。カッパとなつた女官の頭目は、能登守教経の妻海御前である。ところで、カッパになつても女のこと、小鳥鳴き、花咲く春になると、海底にじつとしておれず長髪をたなびかせて、全国に遊びに出る。赤い花々のうえを舞いおどりながら、楽しげに時を過ごす。ところが、夏がすぎ、秋になると、カッパたちは、まつ青になり、ガタガタ甲羅をふるわせながら、関門海峡の海底に逃げかえつて来る。ヘイケガニが聞く。「一体どうしたんだね?」『また、源氏がおしよせて来たわ』彼女等はいたるところに、源氏の白旗がたなびくのを見たという。しかし、それはソバ畑の白い花なのだった。敗北すると、恐ろしい幻影がたくさんできる(後略)<sup>13)</sup>

平家一門の河童になった女たちは蕎麦の白い花すら、源氏だと

思つて恐れてしまう。火野は敗北したことで、白を見れば源氏を思い出し、源氏の幻影を見るのだと述べている。「白い旗」は、昭和十五年に描かれた作品である。ちょうど戦争中であり、そこには敗戦することへの恐れ、滅びゆく者の悲しい運命が暗喩されていて、そのことがごく短い本作のテーマとなっている。もしも戦争に負ければ、女たちにもこのような辛く悲しい思いをさせてしまう。また、滅びゆく者があるのは、歴史の常である。そのような気持ちで作品には込められているのではないか。

## 終りに

本稿では、火野葦平の短篇小説「白い旗」をとりあげた。この作品には、北九州市門司区に伝わる、平家一門の女たちが壇ノ浦の海岸で沈んだ後河童になったという伝説や、筑後川流域に生息する九千坊河童、阿蘇の那羅延坊（奈羅延坊）の許に伺候すると言われる河童など、さまざまな九州の河童伝説を用いて創作していることを指摘した。さらに、「白い旗」には、単に平家の女河童たちが、白い蕎麦の花を見て、源氏の白旗を思い出しおびえるということだけではなく、滅びゆく者となれば、幻影に怯え続けなければならぬ宿命を背負うことになるという

悲哀を描いている。昭和十五年の戦時中は、火野のような兵士達はいつも、滅びることへの悲哀と恐ろしさを感じながら、戦争に對峙し、戦っていたのであろう。

## 〔注〕

- (1) 火野葦平「後書 河童独白」〔河童曼陀羅〕昭和三十二年五月十日、四季社
- (2) 佐藤春夫「河童曼陀羅叙」〔河童曼陀羅〕同
- (3) 北九州市編さん委員会編『北九州市史 民族』（平成元年十月一日、北九州市）
- (4) 和田寛編『河童伝承大事典』（平成一七年六月日付なし、岩田書院）
- (5) 火野葦平「三十年ぶりの門司」〔河童七変化〕昭和三十二年四月五日、宝文館
- (6) 4に同じ。
- (7) 佐藤垢石『河童閑遊』（昭和二十七年二月二十五日、日本出版協同）に同内容が記載されている。
- (8) 喰田弘美・森田清子「河童の年貢」（純真女子短期大学国文科編『九州の河童』昭和六十一年一月十五日、葦書房有限会社）

- (9) 藤澤衛彦「河童譚」(『日本民族伝説全集第八卷』昭和三十一年五月三十一日、河出書房)
- (10) 柳田国男「深山に小児をみるということ」(『山の人生』大正十五年十一月十五日、郷土研究社)
- (11) 下関では、平家一族の女も男も蟹になったとされ、下関の赤間神社には男女の平家蟹が祀られている。
- (12) 3に同じ。
- (13) 火野葦平「敗戦カップ」(『河童七変化』同)

(ますだ ちかこ／本学教授)